

学校だより 希望の鐘

ひとつづつはいいけど、いざいざはいい



八 戸 市 立 小中野中学校

平成28年5月9日(月)

No.40

文責：校長
工藤聡

私の友達シリーズ その①

人生経験が長ければ長いほど、いろいろな人と知り合う機会も増え、友達も増えていきます。私にも、友達はそれなりにいるのですが、そのうちの何人かを数回にわたって紹介したいと思います。

第一回目に登場するのは、I村君です。私と同じ年齢で、静岡県出身です。I村君とは、私が上京（ジョウキョウ：地方から東京へ行くこと）して、浪人（ロウニン：入学試験に不合格となり、進学できないでいる人）生活をおくっていた時、浪人生専門の下宿で一緒になってからのつきあいです。

このI村君は、一年浪人した後、K大（一万円札で有名な福沢諭吉がつくった大学。大隈重信のW大とならんで、私立大学では入学するのが最高にむずかしいと言われている大学。）に入学できたのですから秀才（シュウサイ：学問にすぐれている人）です。容姿（ヨウシ：すがた）も、色白でほりが深く、スマップの稲垣吾郎くんを想像すると、だいたいOKという感じです。ただし、すごい変わったところがあるのです。例をあげると次のようになります。

例① コーヒーに、砂糖のかわりに歯みがき粉を入れて飲む。スースーして、それがおいしいのだそうです。私も誘われて一回やってみました…。みなさんは決してマネをしないでください。

例② ご飯にビールをかけて食べる。これも「お茶づけ」のような感覚で、すごくおいしいのだそうです。私は、ビールは好きです。ご飯はさらに大好きです。しかし、この二つを一緒にして食べたり飲んだりする気にはなりません。I村君が食べているところを一度見たことがあります。その時の感想は、あえてここには書きません。

以上の二つはほんの代表的なものであり、こういうことが日常的にいっぱいある人物がI村君なのです。みなさんは、こんな人物と友達になりたいと思いますか？若い頃の私は、一緒にいて恥ずかしいと思うことが多かったので、あまり好きではなかったのですが、あることでI村君の本当の気持ちがわかり、それからは今日まで親しくつきあうようになりました。

I村君が勤めはじめた年の12月の末に電話があり、「ボーナスをもらったからおごってくれる」というのです。その当時の私のイメージでは、「ケチのI村」ですから、どうせラーメンかハンバーガーくらい（それでも、おごってくれるだけで大変ありがたいことなのですが）だろうと思って行ったら、なんとリッチな感じの和風レストランで、「すき焼き」をごちそうしてくれました。おまけに7人でお酒も飲んだので、会計はかなりの金額になったのです。私とI村君は帰り道が同じ電車だったので、その電車の中で「あんなにおごって、もったいなくなかったの？」と聞くと、I村君は「全然知らない人におごるんだっってもったいないけど、みんな友達だもの。自分はケチだけど、友達にまでケチじゃないよ」とさわやかに言うのです。この言葉を聞いて、今までI村君を表面的な部分だけで変人あつかいしてきた自分が本当に恥ずかしくなりました。私やこのI村君を含めた何人かは、浪人時代に住んでいた目黒区の下宿の名前（高浜荘）をとって、グループを高浜会と名付け、今でも親しくつきあっています。

さて、小中野中学校のみなさんにも、それぞれ友達がいます。小学校からほぼ同じメンバーで学校生活を送ってきたわけですから、交友関係も固定化されているかもしれません。しかし、中学生の頃は、体もそうですが、心も大きく成長して変化していきます。そんな時期に、小学校の時と同じ見方で接していると、クラスメイトの真の姿を見逃すことになりかねません。3年生は土曜日から東京方面への修学旅行です。1・2年生も来週は盛岡や三沢に行くことになります。中学校の行事は、その人の本当の姿を見ることのできる絶好（ゼッコウ：このうえもなくよいこと）の機会です。しかも、うわべだけでなく、本当の友達をつくるチャンスでもあるのです。ましてや、日頃生活している土地を離れ、よそに行くわけですから、いろいろなことを発見できるかもしれないのです。計画や準備段階で、そんなことも意識して活動してみればどうでしょうか。

私も、連休期間中の大会や試合で、ほんの少しですが、みなさんの普段の学校生活では見ることのできない部分を感じることができました。